

## 貝原益軒の紀行文：その製作状況と個々の作品について

板坂， 耀子  
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/12170>

---

出版情報：語文研究. 34, pp.32-41, 1972-12-20. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 貝原益軒の紀行文

— その製作状況と個々の作品について —

板 坂 耀 子

## 一、はじめに

貝原益軒が旅を好み、その生涯に多くの紀行文を記したことは、「慶長以来国学者略伝」その他の数書に見えている。その中には、書名のみで所在不明のものも多く、幾つかの問題を残すが、既に現存することが確認されている作品に限って、その成立過程と、個々の作品にあらわれた文学性について見ていきたい。

貝原益軒（一六三〇—一七一四）は、筑前黒田藩の儒医であり、近世初期の朱子学者として、また啓蒙家として、名を遺した。黒田藩を歴史と地理の、いわば縦と横から調査し詳述した「黒田家譜」「筑前国統風土記」の二書は、文学的な面白さも充分に含む名著である。朱子学者としては、伊藤仁斎のような急進派には反感を抱きつつも、自分自身、常に疑いを抱いて悩み続け、晩年、「大疑録」なる書を著して、控えめながらも注目すべき、朱子学への批判を示した。家にあつては、父や兄たちの運命に心を碎き、子には恵まれなかったが、病弱な夫人や

養子と共に、波乱のない晩年をすごしている。その一見平穩な生活は、不遇ともいえる青年期から、用心深く彼が築き上げてきたものであり、おそらくはそのような生き方から生まれてきたであろう、堅実で現実的な人生観を、彼は「益軒十訓」として知られる啓蒙書類を通して、平易な名文で人々に広めた。

その著書は哲学、医道から、数学、音楽、天文まで、あらゆる方面にわたり、数も多いが、彼がそれらの書を著しはじめたのは、日記や年譜類で検討する限り、ほとんど三十代の半ばからである。それまでは、まとまった著述は一冊もないといつてよく、彼の作品の中で今日残るものの多くは、六十代以後の晩年に集中して、記されている。

紀行文も、その類にもれない。最初の作品「杖植紀行」は、年譜によると、五十才の春に記された。

## 二、「杖植紀行」から「己巳紀行」まで

「杖植紀行」は、宗像神社に青柳種信写の「益軒先生杖植紀行」なる、漢文の一本がある。「扶桑残玉集」には、ほぼ同文

の和文で所収され、それによると宗像神社の漢文「杖植紀行」は、末尾の一行が欠落している。異同部分を検討すると、文章は和文の方が整っており、漢文の方がより古い形をとどめていると推測される。

竹田春庵編「益軒先生年譜」によると、この作品は、  
(廷宝)七年己未。先生五十才。春往浴杖植温泉。作杖植紀行

とあるごとく、廷宝七年、彼が肥後国杖植温泉に行つた際の紀行文である。

平明な記述、道中記的実用性、などと、とらえられてきた、益軒紀行の特色は、すでにこの「杖植紀行」に、よくあらわれている。

嘗聞、肥後国阿蘇郡、杖植里有温泉、能痊宿病、養天性、吾将往洗浴。延宝己未三月三日午時、発於福岡、至干宰府、寄寓平大町三左衛門、弥郷吏辻氏設饗。

の書き出しからして、晩年の有名な「諸州巡覧記」の冒頭、一元禄二年、我が年すでに下寿に及べり。かねてより丹後若狭近江に遊観の志あり。閏正月廿五日余寒猶はげしけれどつとめて京都東洞院の旅館を出、勘解由小路を西へ

とはじまる一文を想起させる口調であるし、その他にも、桜の花の賞美、土地の人々の生活への興味など、後の作品と共通する記述が多い。彦山の僧坊のありさまを克明に記すあたりは、「日光名勝記」や、「諸州巡覧記」中の高野山のくだりを連想させるし、温泉に関する記事も、後の「有馬山温泉記」に類似する。

また、彦山の御嶽が、けわしいから登ることは困難と聞いて予謂既来此地、苟不登絶頂、而空遺思他日甚有遺憾、須二信、脚攀躋、不、能乃止耳

と、「こまで来たからには」と、かごも使わず徒歩で、大変な苦勞をして頂上をきわめ、その爽快さ、頂上から見た景色のよさを、長々と述べている。このような精神は、近世の旅行家においては基本的なもので、益軒紀行においても根本を流れる姿勢といえよう。この種の好奇心、探究心に支えられた冒険性は、中世以前の紀行文の「旅の憂い」にとつてかわつて、近世紀行の中心となる一要素であり、「中空の日記」、「登嶽日記」をはじめ、多くの紀行文に登場してくる。益軒は、そのような積極的な旅行家としての態度を、最も早くうち出した一人であったといえる。

益軒の初期の紀行で残っているのはこの一作のみで、その後約十年間の作品「大和河内路記」、「京畿紀行」などは、いずれも所在が不明である。しかし「杖植紀行」で見限り、紀行文における益軒の姿勢、特色といったものには、当初からずっとさしたる変化はなかったようである。

貞享元年、五十五才の益軒は、公命をうけて江戸に赴いた。同年四月、彼は東海道から美濃路を経て大坂に行き、更に播州高砂を経由して、郷里の筑前に戻る。(日記五号)

同年十月、再び故郷を出て、十一月、大坂、京を経て江戸に入った。そして翌貞享二年三月八日に

今日有往京都之命、且經過木曾路亦有許容、予往上邸謝両

官長（日記五号）

とあり、木曾路を経ての入京を願ひ、許可されたことがわかる。三月十五日、桑手の宿をたつた益軒は、日光路を通過して日光山に上り、そこから倉加野を経て東山道に入った。そして、当時はまだ旅行者もめつたに足をふみ入れなかつた木曾路の旅を続け、関原まで出て、敦賀へ行き、敦賀から京へ入つたのであつた。四月三日のことである。この後六月に帰郷し、途中巖嶋にたちよつてゐる。馬やかごを利用してゐるとはいへ、この前後の日記に、身体の不調を訴える記事も頻出してゐることを思うと、驚くべき強行軍である。

益軒は、この貞享元年から二年へかけての旅の記録を、一つにまとめて、『東路記』なる一本を作つた。貝原家に写本が存する。茶色の大本で全百十四丁、表紙に次のようにある。

東海道

美濃路

播州 自高砂室迄

東山道 木曾路赤坂迄

自江戸日光路

自日光倉加野

自関原敦賀

自敦賀上京

巖嶋記

この項目に従つて、見聞した記事が記され、末尾に貞享二年八月の跋が附せられている。この跋の中で益軒は、この書の題材となつた旅について簡単に記し、これを作つたいきさつを、

一つには自分の思い出のため、また一つには、まだその場所を見ていない人をなぐさめるためと説明してゐる。この書の内容は、まったくの見聞した事実の羅列で、作者は一切登場せず、地誌の性格が著しいのであるが、内容は面白く、作者独自の美意識や見解も随所にのぞいて、まったく没個性的な道中記とも言いがたい。

『東路記』制作の三年後、元禄二年、益軒は再び長途の旅に出た。『日記六号』でみると、閏正月二十五日に京の東洞院の宿を出発し、丹波丹後から若狹を巡つて、二月三日に帰京、同日から今度は南に向つて、和歌浦から吉野山、千早城などを巡り、二十四日に帰京した。更に同二十六日、摂州に赴き、金竜寺、古曾部、伊勢寺などを遊覧して二十七日、帰京した。この時彼は六十才、ほぼひと月の間に、三回にわたる長途の旅を行なつてゐるのである。

益軒がこの直後に記した紀行文の、最も原形に近い写本は、京都大学の建築学科研究室に存する『丹波丹後若狹紀行』（京大図書館のカード書名による）の一本であると思う。もつともこれは、天理図書館蔵の『己巳紀行』の本文と、全く同一の内容で、末尾の奥書も、天理本が、

元禄二年八月望日 貝原篤信書

元禄五年六月十八日検閲之了

壬申六月二十六日 竹洞野宜卿一校

とあるのに対し、京大本は

元禄二年八月望日 貝原篤信書

元禄五年六月十八日検閲之了  
壬申六月二十六日 竹洞野宜卿一校

元禄己卯孟夏備筆書写之

北溟

とあって、あたかも天理本を書写したかに見える。

しかし、天理本「己巳紀行」には、多くの加筆があり、それは後にこの紀行が、「諸州巡覧記」の一部として板行された際、本文との異同をすべて記しただけのものである。それも加筆のみで削除はしておらず、板本を見て書き加えたもののような。加筆がない段階の天理本を、京大本が写したという可能性もあるが、決定はできない。

この「丹波丹後若狭紀行」(以後、京大本「己巳紀行」とする)は、共表紙の大本で、表紙に、

丹波丹後若狭紀行

南遊記事

島上紀行

とあり、この項目に従って、三つの旅の様子が記される。

益軒の、地誌的な記事、地方の人々の生活によせる関心は、この紀行にも強くあらわれており、要領のよい明解な記述で、手ぎわよく道順や距離を述べる一方、興味をひいた事柄については、長い文章を費している。「東路記」とちがって、これには作者が登場し、前作よりもそれだけ紀行文としての形式を整えているが、その存在は、なお漠然としたもので、地誌的な記事の間に、しばしば登場するにすぎず、全体の中に占める位置

は、まだ不明確である。ただし、和歌浦の古歌の、正しい解釈を裏証するために、浜べに終日座りこんで波を観察したり、知りあいの僧と行きあって、長い会話をかわしたり、その行動や思考には、面白いものが多い。行ききくれて、宿を得られず苦労する話にも、中世以前のそれとはちがった、近世の旅人の客観的で冷静な目がかがわれる。

### 三、「王申紀行」成立

「楽訓」における四季の自然描写や、「黒田家譜」中の合戦描写などを見ても、益軒の文章が、基礎のしっかりした、節度あるうまさを持っていることはわかる。だが、彼自身は、「楽訓」や「文訓」その他で述べているごとく、旅も文学も、結局は楽しみのため、それも心を穏やかにし、迷いや悩みを鎮めるという、節度ある楽しみのためととらえていた。すぐれた文章を書くよう努力することすら、心の平静を乱すことになること、彼はいましめているのである。(「文訓」)

そのような彼のことであるから、いかに旅を好み、多くの紀行文を著しても、中世以前のものとは違った新しさを創造しようなどと、気負うはずはないのであるが、やはり、その諸作品の中には、ある程度の工夫や試行錯誤もみえるようである。社会全体も、旅そのものも、中世以前とは根本的な変化をとげたばかりの当時にあつては、旅を好み、紀行文を記そうとするといやでもそのような工夫や試行錯誤を、せざるを得なかつたのかもしれない。

近世の旅と紀行文の性格については後述するとして、ひき続

き益軒の作品についてみよう。前項で述べた元禄二年の長旅から二年後、彼は、「江東紀行」という作品を著した。貝原家に東軒夫人筆の写本が存し、後述する「熊野路記」とともに、貝原淑子氏が、「香推渦」第十三号に、翻刻を発表されている。

京都から醍醐山に上り、瀬田から石山寺を経て、野洲川・八幡山に向い、長命寺山のふもとから舟で竹生嶋に行き、安土の城址から大津・三井寺をたどって都に戻る、近江国を中心とした紀行文である。彼の作品としては短かく、小品に属する。

前作に比して、この紀行には更に、個人的な記事が多い。とりわけ、

半途に山寺の草庵有しに立寄て。しはらくいこひ。かれ飯をくひ。

山上にいたり——

いにしへ此山にもすてに二度のほりしかど。かく見処ある佳境とは  
覚えすおよそ人の心のとまは其好む処によれり年おひて佳境に目  
のとまる時なればかく覚ゆるにや

など、他人にとつてはそれほど重要でない事実までが記されるのが興味ぶかい。これは、益軒紀行にしては珍しいことで、主情的日記的な、昔ながらの紀行のパターンに若干後戻りしているとも見える。とはいえ、益軒紀行の特徴である。土地の人々の生活に関する記事、距離の明示などはあいかかわらず、またその他にも、この作品には、益軒が土地の人々と、いかに交流して、その土地に関する知識を入手していったかということも具体的に描写されていて、彼の、他の紀行を読む際の参考にもなる。

翌元禄五年、「壬申紀行」が成立する。

これは仮綴、共表紙、墨付三十八丁の写本が貝原家に現存する。貝原淑子氏が福岡女子大学の卒論で、その全文を翻刻された。「扶桑残玉集」所収のものは、それに、わずかだが、更に手を加えたあとがみえる。

筑前荒津の浜から船で播磨の室津にいたり、書写山に上り、ついで姫路から兵庫を経て船で大坂へ向い、久宝寺、八尾を過て生駒山を越え、竜田川を見て京を過ぎ、伊賀、伊勢を通って身延山、富士山にたちより、鎌倉を回って江戸に入る。旅行そのものが、盛りだくさんな内容で、紀行の分量もかなり多い。

彼はまず、この作品の冒頭で、

人となり性僻みて閑寂にふけるは我本意なれといかなるぢなみにや我

若き時より年毎に旅の空にうかれて出て東往西還の客となりてやむ事

きも又是我命運の本より定れるにや

と、これまでの彼の作品にみられなかった、改まった前書をして、いわば従来の紀行文としての型を整えている。また末尾には、「東路記」の跋とほぼ同様の、「自分の後の思い出」と「郷里の人に話すときのための覚書」という、二つの理由をあげて、創作動機を説明している。この結びの一文は、益軒にしては長く、ていねいで、冒頭とよく照応する。このように、主人公としての自分を、これまでになく、はっきりと登場させたのは、単に、中世以前の紀行文のなぞりにすぎない旅人像ではなく、彼の描写する豊富な記事の紹介者としてふさわしい性格を、主人公に与える自信がついたからとも見える。

事実、この作品では、彼の得意とする、地方生活に関する記

事、科学的な観察なども、冗慢に流れず全体の流れの中にとけこみ、旅の中途でおきる、こまごまとした個人的なできごとを単に日記的記録としてでない、客観的な面白さを持ちえている

高岡川有頃日の大雨に洪水出て河の渡り四町斗脹り流る船なければ渡るへきやうなしせんすへなくていとすくやか成里人をやとひ肩にのりてわたる水深く渡り遠ければあやうくしてなやみくるしめりされと此役夫はみだりの力あるつよきおのこにて六十になれと猶すまひをよくとて此あたりにては名を得しとなん馮河するよしにいとたのもし水のいとふかき所は我いざらいをひたすかろうして川を渡

今宵は万沢にとまりぬ主の家まうけのさいまいといふせくさうじ物のあしきをくはせむしろなとけからはしくよろつ陀しければ旅のつかれやます主のおのこ口き、て甲州の事共語る(中略)からうして夜半斗万沢に着ぬおとつるのやとりは江戸の客あり今宵はこと家にとまる夜すてに更ぬれとおとつるのあるし我宿に來り客ありて宿せざる事本るなきよしかたる懸るよしなしこと書むはいたつかはしけれと年老ぬれは萬の過行事思ひ出られてゆかしく人の露斗の情も忘れかたきま、に後の思ひてにせんためにすてかたくしるし置侍る

といった、土地の人々の描写にも、精彩があり、波あらく船た、よひて我衰残の力よはき身は目くるめきむねさはきていとたえかたし

道の雨泥ふかくなめらかに僕も馬も行なやみ鞍の上あやうければ中比より歩行にてゆく(中略)雨いたくふり河崎にも馬もなかくかたくとこほり日暮て江戸へはいぬの時に着ぬ

などと旅の苦しみも多く描かれながら、全体としては落着いた冷静さを保って感傷に溺れていない。

とりわけ、これらの描写が、単に時間の推移に従って、脈絡なく登場するのではなくて、それぞれ効果的に使用されて、互いの記事をひきき、かなり意図的な伏線や、やま場を作っていることに、注目したい。一つの独立した事柄を描写する場合にでも、それが見られる。たとえば、身延山の情景を克明に述べて、その美しさを称えた後で、

か、る深山幽谷の人里遠く山川かさなり道けはしくしてかりそめにこえ来るさへいとらうかはしくなやみくるしめる所成にかうやうのいかめしくうるはしき伽藍を多く立つらねたる事めつらか成をかく人のちからを多もちる人のたからをおびた、しくつるやかさする事佛の道にかなへるにやいさしらす

と、軽い批判をしてみたり、また、富士川の加満が澗にかかったつり橋を渡る際に、

板橋も土橋もなく繩橋と云物をかけた其ありさまいふもうらめしす、きと云物をあらく實に編て其下に竹のさ、やかなるを横たてにし其竹の目は六七寸もありなん橋のよこは(下略)

と、まず橋の状態を徹底的に説明しておいて、かやうなあやうきこときけるためしなされとことほしもなく又船にて渡るへきやうもなければむかへ成里人を二人やとひてあとさきより手をひかれて渡るふみて渡ればすたれ動き左右にかたふきて危し左右には少もさきはる物なくつまづきすへりなはたちまちあえなく落て溺れなん我にしたかふやつこなんともほうほう渡る

と、自らの様子を記して、最後に、

いとあやうき事時の間に頭も白く成ぬへしされど此里の賤女なんと頭に置き水桶いた、きうたうたひてのとか成景色にてわたる習へはか、

板板



るうき事もうからすなる物にや

と、土地の女を対照させる。この一文などは、橘南谿の「東西遊記」を思い出させるものがある。

このように、彼独自の文学性——豊富な知識の紹介、客観的な観察眼、対象にふれていく積極的な姿勢、などが、基本的な土台となって作品の世界に定着し、本来、紀行文の伝統である、個人的な記述、主観的な述懐、なども、その世界の中で、それらの土台と調和のとれたものとして、まとめ上げられている点、序文・結語が完備し、様々な記事がばらばらでなく、巧みに相関して立体的な面白さを作りあげている点、更に作品の量・題材となった旅の規模（#10）などからみて、私はこの、「壬申紀行」は、益軒紀行の一つの頂点を示すものであり、単に彼の作品中随一というだけでなく、近世紀行全体からみてもきわめてすぐれた作品の一つであるように思う。

中世以前においては、旅は主として苦しみであり、修行であり、また、定まらない悩み多い現世の、象徴としてとらえられてもいた。しかし、近世、社会の安定につれて、旅は娯楽的性格を強く帯びはじめ、社会自体も又、旅によって象徴されるような、うつろいやすい不安定さを、基本的には失った。少くとも、旅の憂いや苦しみや、それによって更にあらためてかみしめる現世の空しさ、ということをテーマにしている限り、近世の紀行文は、中世以前の作品をしのごくことは困難になった。以前より楽になった条件のもとで、以前より苦しい旅を描写しようとするのは、どうしたところで不自然である。二番せんじはまぬがれないし、そのような凡作が事実多い。

近世の紀行文中ですぐれたもの、たとえば菅江真澄の諸作品古河古松軒の「東遊雜記」、「西遊雜記」、橘南谿「東遊記」及び「西遊記」などは、いずれも旅を娯楽ととらえ、積極的にそれに飛びこんで行く姿勢をあらわにする。この系列に属する紀行作家の多くは、現世を強く肯定し、太平の世を称える。旅の苦しみを、押しつけられた運命としてはとらえず、もともと楽しみを味わおうとして来た旅で、自分の不注意ゆえにおこった結果ととらえて、責任と意地をもって対処する。その苦しみに耐ええぬ自分を、客観的にながめて、こっけい化さえる。旅の憂いや現世の空しさにかえて、彼らが作品の中心とするのは見聞した事実の豊富さ、雑多さであり、それにふれて自分の中にわきおこる思考の多様さ、複雑さ、奇抜さである。そのような意識の定着によつて初めて、近世の紀行は、中世以前のそれから脱皮し得た。

近世後期顕著になる、このような新しい傾向は、近世前期、林羅山や貝原益軒の作品中に、すでにその萌芽をみるといっていい。そしてこの「壬申紀行」は、単にそれだけでなく、近世後期の作品類とならべても、少しもひけをとらない完成度を持っている。

「壬申紀行」制作の二年後に執筆された「熊野路記」は、東軒夫人筆の写本が貝原家に現存する。

ごく小品で、表表紙もない十一丁の書であるが、注目すべきは、この紀行がすべて、資料を集めた空想のみで書かれ、益軒は旅をしていないという点である。これは典型的な例であるが

実は益軒紀行の中に、このような傾向は常にあつた。たとえば「江東紀行」中で益軒は、瀬田の螢について、こう記す。

かねてより此ころは此処に螢のおひた、しくむらかり飛よし聞侍ればそれを見んとて時をまちてまうで来ぬれど。はやく盛すきて今は見えず。ことしより八年はかりまへのとし卯月の比。あづまよりかへり侍りし時も螢を見んとて瀬田にとまりこ、に來りしかとも時すきてむなしくさりぬ。ふた、ひ共に螢を見る眼をおびざる事うらみお、し

ところで一方、「東路記」中には、次のような描写がある。

螢谷は勢多と石山の間なり四月下旬の比此谷より夜ごとに螢おびた、しく飛出て橋の南北にとびちり数万の螢又一所にあつまり丸くかたまりて空にあがり其かたまり水の上におちてちると云毎夜かくのことし漸々日をおふて川下へ下る宇治にては五月上旬の比螢多きさかりなりと云

明らかに見ていないものをも、克明に描写している。これは土産話がわりとしての「東路記」の性格からみると、サーピス精神でもあろうが、他の紀行にも随所にあられる例であり、彼の作品の一特徴といつていい。益軒自身が、空想のみで記述する代償作用的な楽しみを味わっていたとも考えられる。

この作品と同年に「豊国紀行」が成立する。この本は「日本庶民生活資料集成」第三巻に所収され、同書の筑紫豊氏の解題によると、別府の日名子氏所蔵本と福岡図書館本（戦災で焼失「大分県紀行文集」所収の翻刻のみ残る）、小倉図書館本の三本があり、いずれも写本で、原本の所在は不明だが、小倉本が最も原本に近いようだとのことである。「扶桑残玉集」所収の「豊国紀行」も、この小倉本とまったく同一である。筑紫氏も

指摘しておられるが、小倉本には、

享保十一年八月三日

貝原常春五十六歳書

文久二戌冬山内家より求之

の奥書があり、益軒の養子常春が所蔵していた様である。

この紀行もかなり長いもの（小倉本は十行書、五十八丁）だが、「壬申紀行」に比べると、書き出しもしめくくりも、単に事実を記すのみで、全体的にも、覚え書にすぎないようなところがある。作者の行動も一応はたどれるものの、町や山野の説明ばかりが地誌もどきに続いていく部分がかなりあつて、全体としての統一を欠き、未完成な印象を与える。これは、時期的にも、益軒が、ひき続く大旅行をくり返した時代の末期にあつており、「壬申紀行」で一応の完成をなした直後のことであるため、すでにそれほど紀行製作に情熱を抱かなくなつていたことを示すのかもしれない。

この後、元禄十一年に、家族とともに有馬山温泉に湯治に行つた際の紀行「戊寅春遊記」を、益軒作として「扶桑残玉集」が収める。他には見あたらない作品だが、年譜の記事とも一致し、益軒作としてよいであろう。「扶桑残玉集」所収の益軒紀行は、おおむねある程度、手を加えて、整つたかたちになつてゐる。この作品も小品であるが、それなりにまとまつた佳作である。ただし「江東紀行」とも似かよつて、それほど新しい試みなどは見られない。

#### 四、 結びにかえて

益軒の紀行制作活動は、以上をもつて、ほぼおわる。晩年に板行されて好評を博する作品のほとんどは、この時期に書かれたものの中に、その原形を見出すことができる。<sup>註12</sup>すなわち、正徳三年板行の「木曾路記」は、「東路記」中の「東山道」〈美濃路〉を一つにまとめたものである。同年板行の「諸州巡覽記」中、前半の「西北紀行」は、「己巳紀行」中の「丹波丹後若狭紀行」、後半の「南遊紀行」は、「己巳紀行」中の、「南遊紀事」、また「統諸州巡覽記」中、前半は、「東路記」中の「自関原敦賀」〈自敦賀上京〉、後半は、「己巳紀行」中の「島上紀行」と「東路記」中の「播州 自高砂室迄」に、それぞれ若干手を加えたものである。翌正徳四年板行の「日光名勝記」<sup>註13</sup>は、「東路記」中から「自江戸日光路」〈自日光倉加野〉を抜粋したものである。益軒の没後、享保六年板行される「吾嬭路記」<sup>註14</sup>は、「東路記」中の「東海道」〈美濃路〉に、書肆柳子軒が手を入れたものである。

これらの板行までの過程、加筆削除の状況等についての説明は、今回は割愛する。また、板行作品の原稿となったのが「東路記」「己巳紀行」の二冊のみにとどまった点については、いまだ不明であり、今後更に検討を続けていきたい。

最後に、貴重な資料の閲覧を、快く許可して下さい下さった貝原真吉氏、貝原淑子氏、並びに各図書館に、心から感謝の意を表させて頂く。

#### 註

- (1) 著作目録類で検討する限り、「京畿紀行」「大和河内路記」「都鄙行遊記」「摂津国記」「備播紀行」「宇治勢多遊覽記」等の所在も、内容も、一切不明の、益軒作といわれる紀行文がある。すでに知られている作品の別名又は原稿である可能性もあるが、推測の域を出ない。
  - (2) 黒田一貫(黒田藩の家臣、益軒の弟子)の子孫加藤一純の編で、歴代の諸名家の文を集めたもの。益軒の紀行文もいくつか入っている。宮内庁書陵部に、安永六年の写本がある。
  - (3) 「二十一日 己時秋月を発し申時福岡に帰る」
  - (4) 井上忠氏「人物叢書・貝原益軒」、柳田国雄氏「帝國文庫・紀行文集」解題、など。
  - (5) 文政元年、香川景樹。
  - (6) 弘化三年、栗本鋤雲。
  - (7) 書簡で見ると実際に、弟子の竹田春庵等に、この書を貸し与えたりしている。
  - (8) なお、「扶桑残玉集」には、「諸州記事」の名で、その全文が所収されている。「東路記」との異名も多いが、これは板行の過程とも関連する問題なので、今回は省略する。
  - (9) 「扶桑残玉集」には、加筆も削除も行なって、全く板本「諸州巡覽記」と同一になったものが、「己巳紀行」として収録される。
  - (10) 近世紀行においては、これはいずれも、作品の質を考慮する一要素となりうる。
- (11) 菊岡沾涼、大田南畝、本居宣長、瀧澤馬琴等、いずれもそのような傾向をもつとみてよい。

(12) 「有馬山温泉記」のみが、既述作品の中にその原形を見出せない。「戊寅春遊記」は有馬温泉行を題材とするが、原形とはいえない。

(13) 別名「東路記」として知られる。私の見た板本の内題はすべて「東路記」となっていた。

(14) したがって、「木曾路記」「東路記」は、末尾の部分が重複する。

受贈図書 47年4月～9月

建礼門院右京大夫（日本詩入選13）

高閑堂日記

王朝 第五冊

図書寮書刊 平安鎌倉未刊詩集

俳諧連歌草稿（へ一包）（仮称）

稽古巻・評集巻・山里しふ・当季稽古  
巻 他

万葉集難歌解論

高良玉垂宮神秘書・同紙背・地図

平安朝文学事典

校本馬内待集と総索引（笠間索引書刊5）

狂歌美人菱花集

倭鉢羅室叢書 大乘理趣六波羅密經釋文

現代日本文学全集 第28篇・44篇

長唄稽古本

今川為和集(上)（中世歌書翻刻 第3冊）

受贈雑誌 47年4月～9月 ①

国語国文研究（北海道大）48/49／人文論究（北海道教育大）32

／語学文学（北海道教育大）10／文化と言語（札幌大）9巻1

／札幌大学教養部札幌大学女子短大紀要3／藤女子大学国文学

雑誌11／学園論集（北海道学園大）20／文化（東北大）35巻3

／文芸研究（東北大文芸研究会）69／日本文学ノート（宮城学

院女子大）7／一橋論叢67巻4／9／国語と国文学（東京大）

49巻4／9／近代文学論（東京教育大）3／国文（お茶水大）

37／都大論究10／都立大学方言学会会報45/46／国文学研究（早

稲田大）46/47／学術研究（早稲田大）20／演劇学（早稲田大）

13／国語研究（国学院大）32／国学院大学紀要10／国学院雑誌

780／783／国学院大学日本文化研究所紀要29／中央大学紀要30／

中央大学文学部紀要29／明治大学人文科学研究所紀要10／日本

文学（明治大）4／研究年報（学習院大）18／語文（日本大）

37／日本女子大学文学部紀要21／青山語文2／東洋大学大学院

紀要7／専修国文12／跡見学園国語科紀要20／跡見学園短期大

学紀要9／実践国文学1／国文鶴見（鶴見女子大）7／学苑（

昭和女子大）388／393／文芸論叢（立正女子短大）8／和洋国文

研究（和洋女子大）8／成城国文学論集5／大妻国文3／語文

論叢（千葉大）1／人文研究（神奈川大）51／国文学論考（都

留文科大）8／国文学論集（山梨大）10／人文論集（静岡大）

22／研究紀要（静岡女子大）5／静岡女子大学国文研究5／名

古屋大学文学部研究論集19／名古屋大学国語国文学30／紀要（

名古屋大学教養部）16／国語国文学報（愛知教育大）24／説林

（愛知県立大）20／愛知大学国文学11/2